いもせやまおんなていきん

妹背山婦女庭訓

〔解説〕明和八年（一七七一）大坂竹本座初演。近松半二らの合作で、全五段の時代物。当時衰退していた竹本座がこの作品の大当たりにより盛り返したと言われるほど、人気のあった作品です。物語は藤原鎌足親子による蘇我入鹿討伐を題材に、大和地方の伝説や謡曲、幸若舞曲などを取り入れ複雑な構成の大作となっています。

天智天皇の御代、蘇我入鹿は天皇派の藤原鎌足を失脚させ、自ら帝位につきます。入鹿は母が白い牝鹿の生血を飲んで生まれた為、超人的な能力を持っていましたが、爪黒の鹿の血と嫉妬に狂った女の血を混ぜ鹿笛に注いで吹くと、その力が失われるという宿命でもあり、ついにはその弱点を突かれて討伐されるのでした。

〔四段目　あらすじ〕

鎌足の子淡海(たんかい)は烏帽子折の求馬(もとめ)に姿を変え、三輪の杉酒屋の隣に住んでいました。杉酒屋の娘お三輪は求馬に想いを寄せますが、求馬のもとに恋人橘姫が尋ねて来ます。三人の想いがもつれ、逃げ帰る姫の袖に求馬は苧環(おだまき)の赤い糸をつけ、追って行きます。

〈鱶七上使の段〉 三笠山の蘇我入鹿の御殿で宴が催されているところへ、藤原鎌足の使者として鱶七（ふかしち）という漁師がやってきます。鱶七は鎌足からの降伏の書状を渡しますが、入鹿は信じず、鱶七を人質とします。鱶七が剛胆にも横になって寝ていると、槍や毒酒で殺されそうになります。鱶七はまったく動じず大胆に振る舞うのでした。

〈姫戻りの段〉 求馬は三笠山の御殿までたどり着き、橘姫が入鹿の妹であることを知ります。求馬は橘姫に、夫婦になる条件として、かつて入鹿が盗んだ神器、十握の剣を奪うことを誓わせます。

〈金殿の段〉 求馬を追ってきたお三輪は、入鹿の御殿に入り込みます。求馬と橘姫の婚礼が行われると聞き嫉妬に駆られたお三輪は、女中たちにもいたぶられ益々逆上します。そのお三輪を漁師鱶七に姿を変えて御殿に入り込んでいた鎌足の家臣、金輪五郎（かなわのごろう）が刺し、入鹿を討つには嫉妬に狂った女の血が必要であり、お三輪のその血が愛しい求馬の役に立つことを言い聞かせます。お三輪は来世で求馬と添うことを願いながら息絶えるのでした。

（一般社団法人　義太夫協会発行）

鱶七上使の段

栄ゆる花も時しあればすがり嵐のあるぞとは、いさ白雲の高御座。新たに造る玉殿はかの唐くにの阿房殿。ここに移して三笠山。月も入鹿が威光には、覆はれますぞ是非なけれ。腋門の方より宮越玄蕃、荒巻弥藤次。御前よきまま高う吹く、帆かけ烏帽子も十分に、のけぞり返り入り来たり、

「ホウ仕丁ども朝清めな。イヤなに玄蕃殿、このたび新たに築かれたるこの山御殿。朝日に輝くところは吉野龍田の花紅葉。一度に見るとも及びますまい」

「ナニサ〳〵。イヤモ言語に述べがたみきお物好き。瑪瑙のうつばり、珊瑚の柱、水晶の御簾。瑠璃の障子。コレ見られよ。飛石は琥珀、砂は金銀、また釣殿に登り見おろせば、春日の杉も前栽の草びら、若草山、つづら山はまき石同然猿沢の池はお庭の井戸に見えまする」

と話の尾に付く仕丁ども、

「アヽ、結構な御普請でござります。さうしてなにやらふつ〳〵と好い匂ひが致します」

「オヽその筈、縁板、おばしまに至るまでみな伽羅と沈」

「シタリ抹香や鉋屑とは違うた物ぢゃのう。又次」

「サイノウ、またお学問所は唐を写して唐木ぢゃげなの」

「ハアン、その唐木とは何々ぞ」

「オヽまづ花梨」「フン」

「紫檀」「フン」

「黒檀」「ホイ」

「たがやさん」「ホイ」

「うらやさん」「ホイ」
「当卦本卦」「や」
「手の筋」「や」
「男女相性」「や」
「墨色の考」「コレ〳〵」
「失せ物、待ち人」「コレ〳〵〳〵」
「書き判の善悪」
「アヽコレ〳〵、そりゃ山御殿ではなうて山伏ぢゃぞや」
「サア王様もこの山で寝やしゃるによって山伏ぢや」
「エヽ人を嘲弄するかな」
「イヤ長老とは坊主のことか」
「イヽヤ女子の事ぢゃ」
「そりゃ女郎ぢゃ」
「イヤ如露とは花に水かける物ぢゃ」
「エヽどう言やかう言ふと、なんぼ貴様がくずなの弁でもおれにゃ敵はぬ」
「ヤイ富楼那の弁ぢゃ、くずなとは魚ぢゃわい」
「イヤくずなぢゃ」
「イヤふるなぢゃ」
「くずなぢゃ」
「ふるなぢゃ」
「くずなぢゃ」
「ふるなぢゃ」
「くずなぢゃ」
「ヤイ〳〵騒がしいそりゃ何事、清めしまはば早く下がれ。みな行け〳〵」
と追立てやり
「アレお聞きあれ弥藤次殿、我が君この殿へ御移りと見へ、物の音近く聞え申す」

「いかさま、さよう」
と威儀つくろひ厳重にこそ、控へ居る。花に暮らし、月に明かし、酒池の遊びに酔ひ疲れ、御殿々々の通ひ路も数多官女が道楽に、君の機嫌をとりかぶと、調ぶる笛やしゃう、ひちりき、大鼓の音も鶏徳に、己が不徳を押し登る。うんげんの深縁、蜀錦のしとねの上、むんずと座せし有様は、実に類ひなき栄華の殿。玄蕃、弥藤次頭をさげ、
「先だって卿上雲客たちより君の寿を祝し申されし数の島台、ソレ女中方、叡覧に供へられよ」
『アッ』と答へて持ち出づる、思ひ思ひの飾り物。
「なにがな君が寿を祝ふ鶴亀松竹の影は千尋の深緑。松と鶴亀合はせて見れば一万二千の齢を君に譲り寿ぐ蓬莱山。さてまた次の島台は、周の帝の寵妃仮りの情のおととぐさ。実に寵愛の色菊や、葉毎を染めしその筆の命毛長き八百歳。老いせぬや、老いせぬや。薬の名をも菊の酒、酌めども尽きぬ泉の壷。殿上人の方々より御祝儀なり」
と相述ぶる。一しほ興に入鹿が悦び。
「オヽ百司百官より下万民に至るまで、我が在位長かれと願ふことめい〳〵が身の冥加なれば、猶ばんぜいを唱へよ」
と高慢我慢のみことのり。『はっ』と両人階下にひれ伏し、
「我われは申すに及ばず、民百姓も野に手をうって舞ひ楽しむ。誠に戸ざさぬ御代と申すは今此の時に候」
と滅多に追従。猩々の人形に見惚れ官女たち、
「コレ〳〵この猩々が手に持った酌盃も取りはづし、壷にはまことのみきを湛へた。これで御酒宴始めうか」
「いかさま。それはよい御慰み。サア〳〵早う」

と取りどりに手まづ遮る盃の、廻れや〳〵万代も尽きじ、尽きせぬ歓楽の興を催すその所へ

「ものまう、頼みませう」

とどってう声。ばちびん頭の大男。御殿間近くぼっか、ぼっか、ぼっか、ぼっか。着たる木綿の長かみしも。糊しゃきばって立ちはだかり。

「エヽ入鹿殿はこゝぢゃな。内になら逢はして下んせ」

と木で鼻くゝるむくつけ詞。宮越、荒巻目にかど立て、

「ヤア何奴なれば、君の御前ともはばからぬ馬鹿者め、すさりをらう」

ときめ付くる。

「イヤ俺や。難波の浦の鱶七と云う網引きでござんすが、いつやらからこっちの方へ宿替してごんしたお公家どの、鎌きりのだいしんから雇はれて来た使でごんす」

といふを、遙かに見下ろす入鹿。

「ハテ心得ぬ。その鎌足めは首陽山のむかしを学び、跡を隠せしと聞きしに、さては難波の浦に在りけるよな。普天の下、率上の浜、王地にあらざる所なければ、今日まで飢えにも臨まず健固にをりしは我が恵みならずや。それを思はばとくにも参り恩を謝すべきのところ、使を立てしは緩怠なり」

「エヽそれおれが知った事かいの、かう見たところが余程短気者ぢゃわいの。しかし喧嘩はこなんの様にこつきで行くのが徳ぢゃ。鎌殿も一旦は言ひがかりて、てっぱって見ようと思はれたさうなが叶はぬやら、どうぞおれに往て挨拶してくれてて、それは〳〵きつい弱りいの。大慨な事ならもう了簡してやらんせ。懇ろな中は得て心安立て、間違ひがあるものぢゃてのう。コレ仲直りの印ぢゃてて、酒一升おこされた」

と刀の提げ緒にぶらぶらと結びし徳利。きっと目を付け

「未だ日本に渡らぬ兵器唐土にありと聞く。飛び道具のたぐひなるか。何にもせよ怪しき物を所持せしぞよ。かたがた油断致すな」

と眉をひそめて身構へたり。

「エヽとっけもない。とっくりと見やんせ。酒ぢゃ酒ぢゃ。コレそこなお手代衆。早うコレ、進ぜさんせ」

「イヽヤ善悪知れざる鎌足より差し上げし酒ならば、毒薬仕込みあらんも知れず。奉る事罷りならぬ」

「エヽまはすわ〳〵。どれおれが毒味してやろ、茶碗はないかえ、そんなら赦さんせぢきやりぢゃ」

と言ひつゝ徳利の口から口。

「オヽよい酒ぢゃになあ。これを飲まぬといふことがあるかしらぬ」

と振って見て、

「ヤア〳〵南無三。みな飲んでしもた。エヽひょんな事してのけた。ヤコレひょっと鎌殿に逢はんしょとまゝおれが飲んだと云はずに、よう届いたと礼いうて下んせや」

とがむしゃな様でも正直者。真面目になって気の毒顔。

「アヽまだ何やらことづかって来たが落しはせぬか」

とふところ探し、

「オットあるわ〳〵、サアこれ見やんせ」

と一通を渡せば、弥藤次押し披き、

「ナニ〳〵我れ不肖たるによって、暫く心を惑はすといへども、いま一天四海御手の内に落ち入る事、正しく天の譲り給ふ万乗の御位、入鹿公に背くは天に背くと同じと先非を悔いてこゝに降参を乞ふものなり。いまより臣下に属するのしるし。君の齢を東方朔にたと

へ、この桃花酒を以て御寿を祝し奉る。内大臣藤原の鎌足謹んで申す」
と読み上ぐる。
「ハヽヽヽなまくら者の鎌足め。臣下とならんなんどとは、イヤしらじらしき偽り奴」
「なんぢゃ、鎌殿を嘘つきとは、何ぞ確かな証拠がごんすか」
「ヤア小ざかしき証拠呼ばはり。彼れが心腹いうて聞かさう」「ドレ聞きませうか」
「まづ、この入鹿を東方朔に譬へたるが野心の証跡」
「そりゃ又なじょに」
「オヽ昔漢の武帝が代に、東方朔といへる奴、三千年に一度実を作る桃をみたび盗んで喰ひし故九千年の齢を保つ。桃に百の縁をかたどり、ももしき百官を手に入れし入鹿を盗人なりといはぬばかりの底巧み、憎っくいやつ」
と居たけだか。
「イヤ〳〵それゃ無理ぢゃ、無理ぢゃ」
「ヤアうず虫め、何を知って小癪やつ」
「イヤ何にも知らんけど、代りになって来た俺ぢゃによって一番いふのぢゃ」
「オヽ鎌足が代りならば、これをも代りに試みよ」
と、そばなる島台押し取って、眉間へはっしと打ち付くる。台は微塵に飛び散れど、びくとも動かず。
「アヽ好い加減にだだけさしゃれ。その厄払ひの代物。東方朔とやらに譬へたというてごうわかすのか。年にあやからんせとこそ書いておこさしゃったれ、盗人と書いちゃないぞや。それにそちから色々な講釈を付けて盗人せんさく。知った同士は涼しいとやらで、盗人の覚えがあるかして今の投げ打ち。アヽこなんは正直

な人さんぢゃと世間の噂。見ると聞くとで大きな違ひマアそんな盗人と鎌どんを懇ろには俺がさすまいわいの。じんたいにも似合はぬ事さんすの。よもやさうぢゃあるまいかの。ただし覚えがござんすか。イヤさうかいの」

と文盲だらけも理屈は理屈。

「どうじゃいの〳〵どうでごはる」

とやり込むれば、邪智の入鹿もにが笑ひ。

「ハテロがしこく言ひ曲げしな。ぅい奴、でかした。その褒美には鎌足が実否を正すまでおのれは人質。最早や篭中の鳥同然。帰る事はならぬと思へ。ヤア〳〵玄蕃、弥藤次、いざ萩殿にて天盃をめぐらさん。来たれや」

と引き連れて帳台深く入りにけり。

「ア、コレ〳〵おれを質に取らしゃると、着物や道具と違うてしろものが飯喰ふぞや。しかしあのごうはらでは大抵では喰はしをるまい。オヽ空腹に今の酒でよっ程酔が来たわい。ドリャ何処でなと一寝入りやってこまそ」

と伸び上がり

「エヽ腰が重い筈よ。この大小。らっちもないものを差さしておこして、あた面倒な」

と縁板へぐわたりと、鳴るは合図かと。突き出す鎗はしのすすき。構はずころりひぢ枕。不敵なりける男なり。御所より外へ咲き出でぬ、若き御達が入りかはり男見に来る愛想には、お茶よ、お菓子よ、煙草盆。銚子かはらけ持って出で。

「コレそな人は何御用でお召寄せありしは知らねど、さぞ待ち久しう気もつきよう。九献一つ」

と差し置けば、からだ寝返り、腹ばひに頬杖つくづく

打眺め、
「フン貴様は誰れぢゃ」
「オヽ、我れわれは上様の身近く召さるゝ女ども」
「何ぢゃ短い女子ぢゃ。ドレ〳〵立って見い〳〵なるほど。どれもこれもよう煮え込んだものぢゃ。わいらはこゝな飯焚ぢゃな。テモけうな前垂しているな」
「エヽつがもないざればみごと。わしらを問ひやるそなたの名は」
「オヽ鱶」
「ナニ鱶とは」
「ハテ商売の夜網に出りゃ、沖でも磯でも行き当りに、よう寝る故に鱶七といふ漁師々々」
「ヤア料紙とは何ぞ書いてたもるのか。それならば必ず絵や歌はいやぢゃぞや。いま難波津で持て囃す、歌舞伎芝居のその中でもよう聞き及んだ文七や八蔵の紋ならば書いて欲しい」
としどもなき。桜の局すり寄って、
「さうして下々は皆そなたの様な男かや。よい男もたんとあるであろ。地下の女子はうらやましい。芝居は見次第、好い男は持ち次第、ほんにまたこの御所女には何がなる。見るも見るも冠装束窮屈で急な逢瀬のその場でも、衣紋の紐よ、上帯よ、解くかほどくか、大抵では下紐迄は手がとどかず、ついその内には花に風、月に叢雲さはりが出来て、本意ない別れをするわいの」
といふさえ顔に紅葉の局。
「中将や小将あたりで恋すれば、あのおいかけが邪魔になる、尻目づかいは出来ぬ〳〵。その上恪気いさかひもこっちからは檜扇で叩けば、あっちは笏でとめ、つっぱりかえっていきったばかり。いらうても見ぬ逆ほこの雫情も受けて見ず、しんき〳〵で暮らそより、

いっその事に玉の緒も絶えなば絶えたがましであろ。もしもや誘ふ水しもあらば、往にたいわいの」
と鱶七にひしと二人は抱き付く。びっくり敗亡、ごう煮やし、
「エヽけたいな衒妻めら、あっちへきり〳〵うせあがれ」
とけんもほろろに言ひちらされ、
「さってもすげない恋しらず。玉の盃底ぬけ男。不骨者よ」
と不興して、本意なく奥へ入りにけり。あたり見廻はし長柄の酒。庭の千草にさら〳〵と潅ぎかくれば、忽ちに葉立ち変じて枯れしぼむ。
「ハヽヽヽヽフヽヽ。最前の鎗といひ、またぞろやこの毒酒。ハレヤレきつい用心」
と猶打ち見やる庭先へ、弓と矢つかひ、ばらばらばら、追取りかこませ宮越玄蕃。
「いかにしても心得ぬつら魂。尋ね問ふべき仔細のあれば引っ立て来よとの綸言なるぞ。早く参れ」
「オヽ呼びにごんせいでも行くのぢゃ。かりそめにもびこ〳〵と、ちょっとでもさはるかいな、腰骨踏み折り疝気の虫と生き別れさすぞ。ヤコレ家来どもさん、わろ様たちもその鳥おどし放すが最期、取っ掴まへて首引抜き、かたはしからぬたにするぞ。ヤどりゃ、おれから先へ行きやんしょ」
と事とも思はぬ大胆者。胸の強弓矢ぶすまを引明け

姫戻りの段

てこそ入りにける。

されば恋する身ぞつらや。出づるも入るも忍ぶ草。露踏み分けて橘姫。すごすご帰る対の屋の障子にばらり打つつぶて。

「ソリャお帰りの知らせぞ」

とめい〳〵、庭につどひおり、しをり開いて入れ参らせ、

「おいとしや〳〵、御所のお庭の内さへもつひにおひろひなされぬに、恋なればこそかちはだし、さぞ朝露でお裾もぬれん。こうちぎに召させかへん」

と立ち寄って、

「ヤアお振袖に付いてあるこの紅の糸不審」

とたぐり手操れば、くる〳〵と糸に寄る身はささがにの雲井の庭へ引かれ来る、ぬしはゆかしの、

「ヤア求馬様か」

『ハァはっ』と驚く姫よりも、騒ぎさざめく局たち。

「さても見事引き寄せた。七年物の恋人様か。ようこそお入り遊ばした。サア〳〵こちへ」

と手を取れば、

「イヤ手前はつい道通り、このおだまきを拾ひ上げるやいな、滅多に引かれ参った者。何にも存ぜぬ。お赦し」

と出づる向ふを、立ち塞ぎ、

「エヽ手の悪いなされやう。私らに御遠慮は、内々のお話ならどりゃお次へ」

と立って行く。姫はとかうの詞なく差しうつむいて、思案の求馬。

「フンこの御所の姫とあれば聞くに及ばず、入鹿の妹

橘姫」
と言はれてはっと胸せまり、
「入鹿が妹と知り給はばよもお情はあるまいと、隠し包みし甲斐もなう御存じありしお前こそ藤原の淡海様」
と言ふ口ちやくと袂に覆ひ、
「女なれども敵方に我が名を知れば一大事。不憫なれども助け難し」
「なるほどお道理。ごもっとも。生きて居るほど思ひの種。お手にかかるがせめての本望。かういふ内もお姿やお顔を見れば輪廻が残る、サア〳〵殺して下さんせ」
と刃を待ったる覚悟の合掌。
「心底見えた。が、まこと夫婦になりたくば、一つの功を立てられよ」
「一つの功を立てよとはえ」
「オヽ入鹿が盗み取ったるこそ三種の神器のその一つ。十握の御剱奪ひ返して渡されなば、望みの通り二世の契約。得心なければ叶はぬ縁」
「サア是非もなや。悪人にもせよ兄上の目を掠むるは恩知らず、とあってお望み叶へねば夫婦と思ふ義理立たず。恩にも恋は代えられず。恋にも恩は捨てられぬ。二つの道にからまれし。この身はいかなる報いぞ」
と忍び歎いておはせしが、
「オヽさうぢゃ。親にもせよ兄にもせよ我が恋人のためと言ひ、第一は天子のため、命にかけて仕おほせませう」
「オヽ出かされたり。シテまた知らせの合図はなんと」
「こよひ御遊の舞にことよせ、宝剣奪ひお渡し申さん。笛や鼓の音をしるべ。奥の亭までお忍びあれ」

「しからば我れはこの所に暮るゝをしばし待ち合はさん。必ず首尾よう」
「合点でござんす。が若し見付けられ殺されたら、これがこの世のお顔の見納め、たとへ死んでも夫婦ぢゃとおっしゃって下さりませ」
「オヽ運命拙く事顕れ、その場で空しくなるとても、尽未来際かはらぬ夫婦」
「エヽ忝い、嬉しや」
と抱きしめたるをしどりのつがひし詞、縁の綱、引きわか

金殿の段

れてぞ忍ばるる。
迷ひはぐれしかた鶉、草の靡くをしるべにて、いきせきお三輪は走り入り、
「エヽこの苧環の糸めが切れくさったばかりで、道からとんと見失うた。さりながらここより外に家はなし。大方この内へはいったに違ひはない。エヽ誰れぞ来よかし。問ひたや」
と見遣る先より、おはしたが被(かつぎ)まぶかに、しゃな〳〵と豆腐箱提げ歩み来る。
「もうし〳〵」
と呼びかくれば、オット呑み込み早合点。
「オヽお清所尋ぬるのなら、そこをこちらへかう廻って、そっちゃの方をあちらへ取り、あちらの方をそち

らへ取り、右の方へ入って、左の方を真直ぐに脇目もふらずめったやたらにずっと行きや」

「イエ〳〵私が尋ねるのは、お清どのとやらではござんせぬ。年のころは二十三四で色白にくっきりとした好い男は参りゃせなんだかえ」

「オゝ、〳〵〳〵来たげな。来たげな。それはアノお姫様の恋男ぢゃげなの。三輪の里から路追うて来たところを、なにがお局たちが引っ捕へ、有無を言はせず御寝所へぐっと押し込み、上から蒲団をかぶせかけ〳〵、アヽヽヽ宵の中内証の御祝言がある筈と、暮れぬ内から騒いでぢゃ。エヽけなり、こちとまで内太股がぶき〳〵と、卯月あたりの弾け豆。豆腐の御用が急ぐに」

と喋り廻って、出でて行く。

「サア〳〵ひょんなことが出来てきた。ほんに〳〵油断もすきもなるこっちゃない。大それた人の男を盗みくさって、何ぢゃいしこらしい内祝言ぢゃ。余りな踏み付けやう。よい〳〵。ドレその代りどこに居ようと尋ね出し、求馬様と手を引いてこれ見よがしにいんで退けるが腹いせぢゃ」

と行かんとせしが、

「イヤ〳〵〳〵はしたない者ぢゃとひょっと愛想をつかされたら、と言うてこのままに見捨てゝこれがどう往なれう。エヽどうせうぞ」

と心も空。登るきざはし長廊下、行き交ふ女中が見咎めて、一人が留むれば二人立ち、三人四人いつの間に、友呼ぶ千鳥むら〳〵と、こゝかしこから寄りたかり、

「ついし見馴れぬ女子ぢゃが、そなたは誰ぢゃ。何者ぢゃ」

「ハイ〳〵、イヤ私は内方の、オヽそれよ、さっきの

お清殿は寺友だち、奉公に出られてから久しう逢はぬなつかしさ。ちょっと見舞に寄りましたら、これはマア〳〵よう来た。上がれ、茶々呑め、さうしてアノ煙草のめ、アノお上にはああ滅相な御祝言があると聞けば聞くほど涙がこぼれて、あたおめでたい事ぢゃげな、ほんに内方の様なよい衆の御祝言はどの様なものぢやおのれやれ拝んでなり、腹癒よと、うか〳〵こゝまで参りました。どうぞお前方のお心で、その聟様をちょっと拝ましてもらうたら忝うござります」

と言ふ顔も恨み色なる紫の、ゆかりの女とはや悟り、

『なぶってやろ』と目引き、袖引き、

「マア〳〵そちは仕合せな。かういう折に参り合はせ、お座敷拝むという事は、女の身では手柄者だがこちらが呑み込んでお座敷へ出すものゝなんぞさゝずばなるまいな、何と皆さん、いっそのことこの者に酌取らそではあるまいか」

「よからう〳〵」

「アヽもうし、その酌とやらは」

「オヽ何のまたそちたちが知ってよいものか。いまこゝで教へてやろ。幸ひこゝに御酒宴の銚子島台。あり合ひの聟君さまには紅葉の局。梅の局は嫁君役。残りはかいぞへ待ち女郎」

と桜の局が指図して、いやがるお三輪に、長柄の銚子持たせ、持ち添へ。

「マア盃は三つ重ね。嫁君へ二度ついで、左へ二足。コレ立つのぢゃ。エヽ何ぢゃいの。うか〳〵せずとよう覚や。三度目ついで聟君へ。コレ酒がこぼれるわいのう。不調法な。サこれからが乱酒謡ひ物。これも嗜みなければならぬ。サア四海波(しかいなみ)なと謡やいの」

「エヽ」

「エヽとはいやか。そんなら聟さま拝ます事はマアならぬ。サそれがいやなら早う謡や」
とせき立てられ。
「これがマア何と千秋万歳の」
千箱(ちはこ)の玉の血の涙声詰らせてないじゃくり。
「オヽめでたう哀れに出来ました。色直しにはんなりと、梅が枝でも蕗組でもサア〳〵聞きたい。所望ぢゃ、〳〵」
「エヽあられもない事おっしゃりませ。山家育ちの薮鶯、ほう法華経も片言ばかり。上り下りの仇口や、馬士(まご)の唄なら聞いても居よう。もう何事もお赦しなされ。サ早うその聟さまに」
「サア聟さまが見たくば早う謡や。馬子の唄なら面白からう。序でに振りも立ってしや。いやならこっちもなりませぬ。帰りゃ〳〵」
と引き出され、
「サア〳〵〳〵何のいやと申しませう」
「サそんなら謡や」
「アイ〳〵〳〵謡ひまする」
と泣く〳〵も、涙にしぶる振り袖は、鞭よ、手綱よ、立ち上り、
「竹にサ、雀はナア、品よくとまるナ、とめてサとまらぬナ、色の道かいなアヽヨ、エヽここなほてつ腹め、とこの様に申しまする」
と打ち伏せば、皆みな一度に手を打って
「さてもきつい嗜み事。よい慰みで我れわれが、ほてつ腹までよれました。馬子どの大儀」
と言ひ捨てゝ行くを、驚き、
「コレもうし、私もともに」
と取り縋れど、ふり離されてがばとこけ、寝ながら裾

にしがみ付き、引きずられて、声を上げ、
「なう皆さん、お情ない。どうぞ私も御一緒に連れてござって下さりませお慈悲、〳〵」
と手を合はせ、拝み廻るを叩きのけ、
「オヽしつこ、とても及ばぬ恋争ひ。お姫様と張り合ふとは、かなはぬ事ぢゃ、置いてたも、大胆女のしつけをせう」
と耳を引くやら、脇明けより手を指し入れてこそぐるやら。つめりつ、叩いつ、突倒し、
「サア〳〵これで姫様の恪気の名代納った。いよいよめでたい御祝言、三国一ぢゃ。聟を取り済ました。しゃん〳〵、しゃんと済んだ」
と打ち笑ひ、局々へ入る跡は、前後正体泣き倒れ、暫し消え入り居たりしが、
「エヽ胴慾ぢゃ〳〵胴慾ぢゃわいのう。男は取られその上にまたこの様に恥かゝされ、何とこらへて居られうぞ。思へば〳〵つれない男。憎いはこの家の女めに見かへられたが口惜しい」
と袖も袂も喰い裂き〳〵、乱れ心の乱れ髪。口に喰ひしめ身を震はせ
「エヽ妬ましや、腹立ちや、おのれおめ〳〵寝ささうか」
と姿心もあらあらしく駈け行く向ふに、以前の使者
「オヽそなたも邪魔しに出たのぢゃな，もうかうなったら誰が出ても構はぬ〳〵。そこ退きゃ」
と袖すり抜けてかき入る裾、しっかと踏まへ、
「コリャ待て女」
「イヤ待たぬ、ここ放しゃ〳〵」
と身をもがく。たぶさつかんで氷の刃、脇腹ぐっと差し通せば、『うん』とのっけに倒れ伏す。刀つき捨て

辺りを窺ひ、目を配る。奥は豊かに音楽の、調子も秋の哀れなり。お三輪はむっくりと起き返り

「さては姫が言ひ付けぢゃな。エヽむごたらしい、恨みはこちからあるものを却ってそちから殺さする。心は鬼か蛇かいやい。オヽ殺さば殺せ。一念の生きかはり死にかはり、付きまとうてこの恨晴らさいで置かうか。思ひ知れや」

と奥の方、睨め詰めたる眼尻も、叫ぶこわねもうはがれて、さもいまはしきそのありさま。じろりと見やり、

「女悦べ。それでこそ天晴れ高家（こうけ）の北の方。命捨てたる故により、なんぢが思ふ御方の手柄となり入鹿を亡す術（てだて）の一つ。ホヽウ出かしたなァ」

「なんと賤しいこの身を北の方とは」

「ムホヽウそちが語らひ申せし方は忝くも中臣の長男淡海公」

「エヽ、シテまた私が死ぬるのがいとしいお方の手柄になって、入鹿を亡ぼす術とはえ」

「ホヽヽその訳語らん。よっく聞け。彼れが父たる蘇我の蝦夷子。齢傾くころまでも一子なきを憂へ、時の博士に占はせ、白き牝鹿の生き血を取り、母に与へしその験（しるし）。健かなる男子出生。鹿の生血胎内に入るを以て入鹿と名付く。さるによってきやつが心をとろかすには、爪黒の鹿の血汐と疑着の相ある女の生血、これを混じてこの笛にそゝぎかけて調ぶる時は、実に秋鹿の妻恋う如く、自然と鹿の性質顕はれ、色音を感じて正体なし。その虚を計って宝剱あやまちなく奪ひ返さん鎌足公の御計略。物蔭より窺ひ見るに、疑着の相ある汝なれば、不便ながら手にかけし」

と件の笛の六穴に、たばしる血汐受け潅ぎ受け濯ぎ、

「いまこそ揃ふこの幻術。この笛こそは入鹿をひしぐ

火串ならん。ハヽありがたや」
と押戴き、いさみ立ったるその骨柄、げに藤原の御内にて金輪五郎今国と鍛へに鍛へし忠臣なり。
「のう冥加なや。勿体なや。いかなる縁で賤(しず)の女がさうしたお方と暫しでも、枕かはした身の果報、あなたのお為になる事なら、死んでも嬉しい、忝い。とはいふものゝいま一度、どうぞお顔が拝みたい。たとへこの世は縁薄くと、未来は添ふて給はれ」
と這ひ廻る手に芋環の
「この主様には逢はれぬか、どうぞ尋ねて求馬様もう目が見えぬ、なつかしい、恋しや〳〵」
といひ死にゝ、思ひの魂の糸切れし。小田巻塚と今の世まで、鳴り響きたる横笛堂の因縁かくと哀れなり。
今国ふびんいや増しに、
「せめて葬り得させん」
と背なにお三輪がなきがらを、おい〳〵駈け来る荒しこども、
「曲者やらぬ」
と追っとりまき、
「ヤア手取りにせよ」
とどっと寄る。当るを幸ひ、砂石の如くほり飛ばされ、逃げ行く奴ばら余さじと、奥深くこそ

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。